

第19回日本生命倫理学会年次大会 2007年11月10日
シンポジウム「死生の文化と生命倫理」

演 題 名	生命の研究の拠りどころと歯止め—科学の外に倫理はあるか
演 者 氏 名	ぬで島次郎
演 者 所 属	自治医科大学（客員）
発 表 要 旨 （1400字程度）	
<p>生命科学・医学の進展に対して、死生観ないしその背景にある宗教文化に基づく論議は、歯止めになりうるだろうか。逆にいえば、生命科学・医学の拠りどころとなる倫理は、宗教や文化によって異なるのだろうか。</p> <p>科学は事実の探求、宗教は価値の探究と整理されてきた。科学は事実を探求し、そこで見いだされた事実の意味を与えるのが宗教ないし哲学だとされてきたのである。だが、私はこの図式に疑問を感じるようになった。それは、1) 科学が価値には関わらない、あるいは関わるべきでない営みだとする、科学＝客観／宗教＝主観という二分法への疑問であり、2) 科学に対する歯止めとして宗教（に裏打ちされた倫理）を対置しようとする構図に対する疑問である。</p> <p>1) 近代科学の歴史は、宗教からの自立の歴史だった。だがそれは、精神世界（の探求）からの、事象世界（の探求）の分離であったのではない。新たな価値の探求に関わる、新たな精神世界の分離独立だったとみるべきである。ある事象について知りたい、解明したいと思えば、世間や戒律がどう指弾しようとも、意に介さず解明に向けて励む、という精神＝価値の独立である。何かの役に立つからではなく、知りたいがために知るという自己完結的な精神の解放。それが科学の自立である。</p> <p>したがって、現代の科学者が、科学の外に、とくに何らかの宗教（に裏打ちされた死生観）に拠りどころを求めようとするのは、近代の自立以前の状態への退行であるというべきである。社会が倫理の名の下に同じことを科学に求めるのも同断ではないか。</p> <p>2) 日本では、生命科学・医学の研究と臨床応用の何をどこまで認めるか認めないかについて欧米での議論を参照する際、その背後に宗教的信条を読みとり、西洋ではキリスト教が生命倫理の基盤を成しているが、日本にはそうした基盤がなく倫理の議論ができないとする論が多かった。だが、科学に対する歯止めとして科学以外の宗教ないし死生観なるものに期待しようとする議論は、実りのある結果を生み出さないのではないか。</p> <p>これが知りたいと思えば何をいわれようと知ろうとする。科学は本来そのような反社会性、反倫理性をもつものである。だが、だから科学は信用できない、社会が科学以外の倫理に基づいて規制するべきだとしてしまうのは、安易に過ぎる。科学も一つの精神世界なのだから、そこに別の精神世界を対置しても、不毛な「神々の闘い」を惹起するだけである。</p> <p>科学の歯止めは、科学の中に求めなければ効果はあがらない。私は、生命科学・医学が第一に従うべき規範は、「科学的な必要性和妥当性を認められたことしか、人および動物にしてはならない」であると考えている。科学的必要性とは、昨今幅を利かせている「有用性」とは異なる。有用性は、科学以外の実用を基準にした欲望充足の原理であって、科学本来の、あることを知るためには何でもしたいという欲望に対する歯止めにはなりえない。むしろそれに新たな口実を与えるものである。科学的必要性和妥当性とは何か、それらはどうすれば担保できるかを、科学者と科学を享受する者とが共同で鍛え上げていくことが、現代の科学の倫理だと私は考える。</p> <p>生命倫理とは、要は欲望の抑制の原理である。科学の欲望に対しては科学の倫理を求めべきで、死生観や宗教文化が関わるとすれば、先端医療技術を後押しする、科学以外の人の欲望に対してであろう。</p>	